

大人になったら

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

筆者は播州平野の末端部から丹波篠山方向に突き出た山村の生まれである。真冬には小学校への道すがらの焚火で温めた焼石をカイロの代用として、軍手で掴んで通学したものだ。そのうち教室に薪ストーブが設置され、高学年になると学校の裏山でストーブ用の薪作りが男子の仕事であった。小学3年生のときに、「大人になったら（何になりたいか）」という作文を書かされたが、多かったのが男子は炭焼き、新しいところではトラックの運転手、そういえば航空自衛隊というのもいた。女子は自ら通ったこともない幼稚園の先生が人気であった。

1968年、大学に入学するや否や大学紛争が勃発し、筆者の大学も約9カ月間封鎖状態にあった。封鎖中は生活費が嵩むので田舎に帰り、植栽や下刈りのアルバイトに従事した。炭焼きによって雑木が伐り払われた山肌に杉や檜の苗を植え、肥料をやり、下草を刈ったのである。当時、筆者たちがいい年になった頃には各戸に何十万かのお金が入るといって両親らは楽しみにしていた。

その立派に育つはずだった杉や檜だが、その後十分な手入れがされず、今ではただただうっそうとした林を形成するばかりとなり、いわゆる里山が崩壊状態にある。猪は別としても元々そこに生息していた狸、狐、鹿までもが人家付近にまで進出するようになり、田畑はすべてネットで重装備せねばならない状態になっている。

今にして思えば、炭焼きや薪による循環過程が崩壊し、経済性のみが重要となり、輸入木材に押されて、売りようのない山林のみを残す結果となった林業政策ではなかったのか。筆者は山で稼いだ日当でぶらりと東北旅行に出かけたが、あとには年寄りと手つかずの山々が残っただけである。適宜、政策の真つ当な検証と政策変更がなされないまま、事態は悪化の一途を辿ったように思う。これは農業政策についても同じである。確かに農業は機械化され、大勢の手を用いなくても作業ができるようにはなったが、筆者の田舎のように米作りから野菜作りなどに転換できない山間僻地では、長年に亘る減反政策によって結果的に村と田畑が崩壊していった。AIだIoTだという経済社会から取り残された集落は票田ともみなされず、ひたすら限界に向かって突き進むことになる。

筆者が生まれたのは1950年。その頃には村の多くの人達が山で杉や檜を伐り出し、木馬（きんま）に載せて山から平地までおろし、馬力で運んでいた。木馬は狭い山道に盤木を等間隔で並べ、油を塗った上を梯子状の櫓に載せて輸送するものである。谷川を越えるところには廃材で橋を架けた。急勾配では張られたワイヤづたいにブレーキを掛けながら運んだ。もちろん怪我也多かった。現代なら労災云々が叫ばれるところだがそんな制度もなく、自身の不注意、怪我をした者の損という時代であった。

立派な木材があるとしても、筆者の田舎では、採算など容易にとれるはずもなく、チェーンソーで伐り倒す人材さえいなくなってしまう。あの地が、その昔、我が祖先が住み着いた頃の里山に戻る日がいずれ来るのだろうか。いや、住む人がいなくなり、村全体がかつてのように雑木に覆われた山に戻るのではないだろうか。

ぱちぱちとはじけるような音がする焚火に顔をほてらせ、焼石を軍手で抱いて通った田舎道を見るたびに、経済発展に振り回され、なすすべもなく崩壊していく炭鉱町の生活を描いたJohn Fordの映画『我が谷は緑なりき』が目に浮かぶのはひとり自身の思い過ぎでしょうか。田舎を離れて都市で暮らす筆者があれこれ言う立場にはないのだが。

